

せっかち 園長の ひといごと

2016、10、31

認定こども園あかみ幼稚園・メイブルキッズ 統括園長 中山昌樹

ようやく秋らしい日本晴れが見られるようになりました。最近の気候は温暖化あるいは気候変動のため、私が子どもの頃と違って秋でも雨が多く、天気予報が的中しないことがありましたね。3・4・5歳の運動会では天気の見方に悩み、園長・私の判断も難しかったです。午後の種目を中止にしましたが、参加を希望してくださった家族の皆さん、小学生には申し訳なかったです。

・・・今後はさらに、今ある基準（マニュアル）の精度を上げ、皆さんがより楽しめるよう、努力したいです。

私として気持ちが救われたのは子どもたちの活躍です。0・1・2歳のミニミニ運動会でもそうですが、4月から3月の1年間を見通した10月の時期に、「育ちのきっかけ」としての行事・運動会が、いい形で子どもの育ちを後押ししてきたと感じています。これは本当に、職員が保育者という専門性を活かしたうえで、運動会の意味や意義を、保護者の皆さんと共有できたからだと確信しています。その意味でも、ご家族、保護者の皆さんには、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

運動会→



←ミニミニ運動会



さて、はじめの話題です。

今回はじめにお伝えするのは、小学校にも地域企業のバックアップが関わっていますよ！ ということです。

ここで紹介するのは、夏祭りとかでご存知の方も多いと思いますが、本園の卒園生の保護者である（保護者会の会長さんでもあった）保田さんが会社のチームで取組んでいる、【出前授業】「クルマとファンと、ときどき かざぐるま（かぜの ちから くらべ）」です。この最初の取組みが天明小学校で行われた時（4年前）に授業を見せてもらい、このたび、以下紹介する吾妻小学校で行われた授業を再び参観させてもらいました。

↓続く



私がいろいろ感心したのは、

①昔と違って余裕がなく学校の授業で実験を行うのが難しくなっているところを、しっかりサポートしている。

⇒こうかな?どうかな?と予測して考え、それを実際にやってみる・・・違ったらまた考える・・・そして納得。これが、「深い学び」。

②しかも、手厚い人数の指導者で。

⇒このように実験をやる授業では、先生の人数が複数の方が絶対的に有利。小グループの実験に対応しています。

③指導のあり方がよく研究されていて、学校の先生方が参考にしたいと言うほど。

⇒やはり企業だから、実戦だから、スゴイです。机の上で知識を覚えるのとは違います。

④指導のあり方が常に研究されていて、改善され、進化し続けている。

⇒常により良くしていこう・・・これは学校の授業でもそうあるべきですが・・・。



このように学校では（そして、認定こども園でも）、学校の（園の）先生だけが教育を行う時代でなくなってきました。別に先生が楽しもう、ということではなく、あくまでも学校を（園を）を中心に、地域のいろいろな大人たちが教育や子育てに関わる方が、学校の（園の）質も向上するし、何よりも子どもたちが「深い学び」を得ることができる、と思うのです。

さて次は、ためてあった新聞の記事から・・・

以下はすべて、読賣新聞です。話題の一つは、国が子どもにお金を投資する、ということ。いろいろなことが起こる現代社会ですが、何が大切なのか?・・・個人レベルの価値や好みではなく、国の政策として何が大切なのか?・・・優先順位はどうあるべきか?

ということ、皆さんと考えることができたらいいなと思います。そして、親・保護者の皆さんの声が、何らかの形で政策に反映することを願います。・・・11月には県知事選があります。そして来年には、佐野で市長・市議選があります。

②もう一つは前回の「ひとりごと」でお伝えした、家族の育児・家事負担について。夫婦、家族の人間関係も、現代社会では難しくなってきました。右に紹介した家事分担（そこには育児も含まれるでしょう）の意識のギャップが、そこでの人間関係を難しくする一つの原因と考えられます。

しかし、このような意識のギャップは、あって当たり前ではないでしょうか？大切なのは、そのギャップをどう埋めるのか・・・ではないかと思うのです。というのは、夫婦であれ家族であれ、人間が複数いれば必ず何らかの問題が生まれます。キレイごとではありませんから。大切なのは、そこでの問題の解決の仕方だと思うのです。

どちらか一方が強くて、言われた弱い方が我慢するというのでは、全然問題の解決になっていませんね。ましてやお互いを非難し合うだけでは、問題をより悪化させていると言わざるを得ません。

私自身もそうでしたが、できれば子どもたちに、大人がきちんと問題解決する姿を見せたいと思います。なかなか理屈通りにできませんが、ぜひ親業（この「ひとりごと」でお伝えしてきたし、先日講演会もありました）で学べる『わたしメッセージ』を使って、相手にじぶんの気持ちを率直に伝えてみませんか？・・・主語を「あなた」から「わたし」に変えるだけで、人間関係がかなり変わります。

例

あなたが家のことを一緒にやらないと、**わたし**は仕事と両方やらなくてはならなくて、とっても**たいへん**。
あなたがときどき夕食作ってくれると庭の草取りができるから、**わたし**はとっても**助かるわ**。**うれしいな**。

なかなか思うようにはいきませんが、気持ちを相手に伝えることを意識するだけで、人間関係（親子関係も、職場の関係も）は変わると思うのです。

共働き夫婦家事分担で意識差 ネット調査

共働きの夫は家事の3割以上を担っているつもりでも、妻は2割程度としか認識していない。こんな意識の食い違いが、ライオン（東京）の調査で浮き彫りになった。

調査は今年4月、全国の20～50代の共働き夫婦1000組2000人を対象に、インターネットで実施した。

夫が家事を担っている割合について、夫の自己申告では「20～39%」が最も多く、次いで「60%以

上」「10～19%」の順。一方、妻からみた夫の家事分担割合は、最多は「20～39%」で同じだが、次いで「10～19%」「0～9%」。平均すると夫の自己申告では34%だが、妻の認識では21%だった。

夫が日常的に担っている家事について尋ねると、夫婦の認識で最も食い違ったのは「食事の後片付け」で夫（52%）と妻（37%）で15%の開きがあった。食後の片付けをどちらが担っているかをそれぞれ自己申告させたところ、妻は

「食器を運ぶ」「洗う」「生ゴミを捨てる」「シンクの周りを拭く」など全8工程で9割前後の実施率なのにに対し、夫は工程が進むほどに実施率が下がった。

「生まれ変わっても同じ相手と結婚したいか」の質問には「結婚したい」夫が66%なのに対し、妻は50%。ただし夫の家事分担割合が2割以上の認識を示した妻は63%と、高い比率だった。

同社の担当者は「夫婦間で家事のやり方の違いや分担について認識を共有し『家事ギャップ』を解消することが、夫婦円満につながるのではないかと話している。